

進む方向がひとつなら、
そこに「道」が出来上がる。



TAKUMI projects.

Presented by SPC-SOUKEN

File.3

継承の匠

継承について学ぶ

組織でも話題に事欠かない『継承問題』。実子が継ぐパターン、実子ではないが身内が継ぐパターン、社員が継ぐパターン、その形態は様々である。十人十色という言葉があるが、その経緯やドラマを考えたら、百社百様であろう。

今回、取り上げさせて頂いたのは中央統括本部の鈴木さんと上田さんが経営する『ベルファミリー』である。上田さんは鈴木さんのご長女の旦那様であるが、もともと異業種の彼が、鈴木さんのもとで素晴らしい才能を発揮し、お互いがとても良い関係で会社を繁栄させている。

取材当日、鈴木さんは「うちは本当に何も特別な事をしていないのに、恥ずかしいわ!」とおっしゃられた。その謙遜の言葉に、語弊があるかもしれないが、全くその通りだと思った。『継承』するのには、特別な事は必要無いのだ。自分の大切にしていたものを引き継いで貰うのに、如何に相手にわかって貰えるか。日々の小さな繋がりの積み重ねが、真の継承に繋がっていくのではないか。寄り添い、ぶつかり、または離れて、それでも同じ方向に歩いて、振り返ると自然と後ろに道が出来ていた、それが継承なのではないだろうか。

『継承』に近道あらず。彼らの成功の秘密を知る為、まずはお二人の人となりから紐解いて行こうと思う。

(有)ベルファミリー

1998年設立、埼玉県を中心に美容室10店舗を経営。
<http://www.pure-hp.com>



上田 秀文

Hidefumi-Ueda

1971年4月6日生まれ。2004年4月SPC入会

次子さんの道

次子さんは、北海道で5人姉妹の次女として生まれました。幼い頃から美容師になる事に憧れており、学校の参観日や外出時には、母の髪をセットしていたという。高校卒業後は美容学校に通い、苫小牧の美容室に住み込みで勤務。婚約を交わしている大きなサロンで、盆暮れにはパーマをかけて客が床に座って待つような繁盛店だった。彼女が22歳の時、一番下の妹が高校卒業を機に上京する事になり、美容師という仕事はどこでも出来る為、妹の保護者として一緒に上京した。そして、ひばりヶ丘の美容室に勤務。こも住み込みで給料も安かったが、彼女は美容が本当に好きで、コンテスト出場に向けて努力する日々を送った。

そして1991年、新規オープン『ファンタスティックサム』というサロンにオープニングスタッフとして入社。17年のブランクを乗り越え、技術者に復帰した。

4年ほど経ったある日、岸上氏に「あなたにだって店を譲りたい」と独立の話を受けた。彼女は迷ったが、旦那様の後押しもあり、そのサロンの購入を決意。こうして彼女は1店舗のオーナーになったのであった。オーナーとなって5年も経った頃、岸上氏に「そろそろ経営の勉強をしてみては？」と、SPCのセミナーに誘われた。

「入会するにあたっては、岸上氏から『全て自分の責任のもとでやってみよう。1年間は休まず会議などに出席する事』と助言された。組織では色々情報が入り過ぎて、最初は何をやって良いかわからなかったが、尊敬出来る人物にはたくさん出逢えた。中でもセミナーをたくさん聞いていた松園歴代は、同じ女性なのにパワフルで印象的で、パート上がりの1店舗オーナーの彼女からは天上の人であった。ある時、社員に何か新しい事をやらせようという他愛も無い会話の中で、松園歴代に「自分が知った上で任せなさい！」そんなひと言葉を聞いた。それが今でも心に残るひと言葉となつて、彼女の中で生きていくという。

秀文さんの道

秀文さんは宮崎生まれ。父はNHKに勤務しており、いわゆる『転勤族』だった。幼少期から福岡、熊本など、九州地方で引っ越しを繰り返した。福岡大学を卒業後、居酒屋『天狗』などで知られるテニアライドという飲食業の会社に就職し、上京。そこではチェーン展開の仕方やアルバイトを使って店の運営、人の使い方などを学んでいた。そして、仕切っていた店のアルバイトとして次子さんのご長女が働き始めた事で、2人は出逢ったのである。

彼は3年半後に退社し、岸上興自氏の紹介で、岸上氏の弟・英明さんがやっている神田神保町の『満足亭』という料理屋に転職した。英明さんは「曲がった事が嫌い！」な職人気質。鮪が売りのお店で、冷凍物も一切使わず、お米も精米からしてあり、営業が終わると明け方の4時まで仕込みをする日々で、体力的にハードな仕事であった。

当時、SPCの本部は神保町にあり、岸上歴代の身内の店という事もあって、『満足亭』は懇親会で良く使われていた。会員さん達は気性の荒

い人も多く、怒号と共に灰皿が飛び交うような喧嘩も時々在り、もみくちゃになって誰かのシャツが破れる事もしばしば。いつも店員として『とんでもないお客様達だ！』と傍観していたという。

そして29歳の時、次子さんのご長女と結婚。その頃、SPCの本部は恵比寿に移され、『満足亭』の売上げが大幅にダウンした。次子さんが多店舗化を考え始めたタイミングと丁度重なり、彼は美容経営の道に転身する事となった。

とは言え、彼にとつて美容とは完全に未知なる世界。義母や義妹、義父も手伝う家族経営の店にポジションと入り、形としてはレセプションというポジションを与えられたが、何をしても良いのか、何が出来るのか、まあ仕事は無いに等しかった。朝礼と終礼の議長をしていたが、営業中に暇過ぎていたまれば、パチンコ屋に逃げ込む事もあった。子供も出来たのに、大黒柱として余りにも頼れない自分への不甲斐無さ。居場所が無い中で時間だけが過ぎ、ただただ焦るばかりの毎日を送っていた。

歩き始めた一人の道

「経営していくにあたって、やはり男性の力が重要だと思つて、上田を入れました。自分で引っ張って来たのだし、彼に対していつも『何とかしなさい！』と思つていましたね。給料を払うからには、『何か仕事を与えなければ！』と。私は考えるより行動が先の、直感タイプなので。」

その頃を振り返って、次子さんは笑った。秀文さんは以前、人をまとめる仕事をして来たし、自分には無い能力を持っていると彼を認めていた。店にも慣れて来た頃に、2店舗目の出店の手伝いをして貰い、店探しから求人、オペレーション、会社の仕組みづくりなど、少しずつ彼に仕事を任せて行つた。

彼女はこれまでSPCで『自分で気付け！』と育てられて来た。秀文さんの仕事ぶりに対して、先回りして気になる部分も『怒つても仕方無い、自分で体験させねば身に付かない』と見守つて来た。そして、『人は人と関わる事でしか磨かれない』と自分自身が感じて来たので、秀文さんをSPCに誘った。

「まさか、あの『とんでもないお客様達』の会合

に、自分が身を置く事になるとは夢にも思いませんでしたね！」

秀文さんは当時を思い出して、心情をこう語った。そして入会前、次子さんの勧めで廣瀬歴代の所に臨店したという。

「廣瀬歴代が自ら最寄りの駅まで迎えに来て頂いて、その後、全部の店と事務所を見せて頂きました。自社の資料も全て譲って頂いて、その温もりに感動しました。私の話を聞いて、『大丈夫、大丈夫！僕も琵琶湖のほとりで7年間も釣りをしていたから』と言って頂いて、『SPCには異業種出身の仲間もいっぱいいるから』そんな言葉に、当時は本当に救われました。」

それがきっかけとなり、2004年、秀文さんはSPCに入会。主に資質表現で、3年間みっちり組織活動に尽力した。

そんな彼を次子さんはこう語る。

「私も組織ではしょっちゅう泣いていたし、彼もいろんな問題や苦労があったでしょうね。それでも自社では何の愚痴も言わず、頑張っていました。私達はタイプも違うし、能力も違うけれど、SPCで同じ土壌の同じ教えを受けて来ました。お互い考え方は違つても、同じ方向性に向かつて、特に争う事もなくやって来たのは、まさにSPCのお蔭です。」

鈴木 次子

Tsugiko-Suzuki

1950年3月6日生まれ。2001年5月SPC入会



同じ土壌の同じ教え、 SPCで培われた強靱な絆。



『共に育ち共に豊かに共に幸福を—より多くの人々と—』これがベルファミリীগруппの理念である。社名が表すように、社員もお客様も家族のように大切にしている会社である。会社のベースとなる理念を創ったのは勿論次子さんであるが、秀文さんがこれをしつかり引き継ぐ事になったエピソードを紹介しよう。

魅惑のSPC

SPCに入会して秀文さんは、それまで外から見ていたものとは全く違い、組織の温かさや素晴らしさを実感していた。「入会はパスポート、通行手形。他人の会社を好きに見ていい」

先輩の言葉通り、会員は誰でも自社の会議や事務所、何でも見せてくれた。

「SPCは『太鼓』。自分が大きく叩けば大きく反響があり、小さく叩けば小さなものしか返ってこない。叩かなければ音もしない」

この教えの通り、彼は仲間の胸に体当たりで飛び込んで行った。

飲食業界では、秘伝のタレは企業秘密が当たり前。それなのに、SPCはどの会員も、秘伝のタレを見せたがる。これは他業種から来た彼には目からウロコで、それは何故なのか聞くと、

「これがSPCの理念だから」と誰もがこう口を揃えた。組織には、知りたい事や疑問に

思っていた事の答えが全て揃っていた。
「宝物ザックザク！有り難い！」彼はSPCをこう語った。

大怪我と学び

様々なサロン経営を見て、知識も貯えた彼は、自分にも店づくりが出来るのではないかと考え始めた。やり方や仕組みさえあれば、ベルファミリィをやりながら自分の会社も運営出来ると考えたのである。

現金500万円に、借入が1000万円。彼はこれを開業資金に箱を借り、求人もした。しかしこれが全くの大失敗をもたらししたのである。客が来ない、スタッフもついて来ない。あつという間に閉店に追いやられ、その借金の尻拭いを次子さんにして貰う破目になった。初めての大怪我に彼は深く落ち込み、組織の仲間達からも1年以上音信不通となり、自分の殻に閉じ籠ったのである。

「かすり傷ひとつ付けずにプロ野球選手になった人はいない。負けて負けて、怪我の仕方を学ぶんだ」

そんな先輩の慰めがようやく耳に入り始めた頃、やつと自分の失敗の原因に向き合えたのだという。

「自分は美容師じゃないから『ハートじゃなくて仕組みでやってみる！』なんて、失敗して当たり前だったんです。事を起こすには大義や目的が必要で、そこに集まる人々がやり

がいを持てるかが大事なんですよね。自分にはその時、そんなもの何も考えていなかったし、何も準備していなかった。どんどん店を作って売上げを上げて行く事しか考えていなかった。義母と真逆のやり方でやってみて、如何にコンセプトや理念が大切かを思い知らされました」

人を家族のように大事にする事。彼は「大怪我」をして、次子さんの理念の素晴らしさを思い知ったのであった。

強まる絆

こうして次子さんと秀文さんの二人は、スタッフとの信頼関係をベースに、社員の為に『良い会社、強い会社』を目指し、共に会社を充実させて行った。現在、10店舗中の2店舗は海外にあるのだが、それも娘さん（次女）と社員の希望を叶えた出店である。

継承について、次子さんはこう語った。

「ちゃんと最後まで放り出さずに見てあげる事が重要ですね。やれ、やれ、ではなくて、やりたいと思わせるように仕向けて、徐々に徐々に責任を任せていきます。でもね、経営権は最後まで分かち合うつもりですよ。何かあった時に、助けられないからね」

SPCでのたくさんの人からの言葉が、学びが、彼らの中で生きていく。今後もお互いを支え合って、ベルファミリィは繁栄していくだろう。